

自ら学ぶ教職員 活動報告書

グループ名 岐阜グローバルラボ 42.195

テーマ SDG s の視点を取り入れた授業研究と地域連携の取り組み方法を学ぶ

取組のポイント・成果

第1回 11月2日(土) 14:00~17:00 場所 岐阜市中央青少年会館

「SDG s の世界をカードゲーム体験して、繋がろう」 参加人数20名

講師 ※辻晃一氏 丸重製紙企業組合理事長 ※加藤慎康氏 合同会社カモケンラボ代表社員



SDG s の基本事項を学ぶとともに、2030年目標達成へのビジョンについてカードゲームを通して参加者同士が共有し、体験することができた。また美濃地区において持続型、循環型社会を見据えて、ふるさと教育やひとづくり、地域電力普及活動を行っている両名の講師のお話を伺い、参加者は地域と学校の連携について深く考えるきっかけとなった。また、学校との連携を考えている様々な機関の方も参加者として協力をしていただき、多様な視点を持つこともできた。

第2回 11月4日(月) 13:00~18:00

場所 百笑宿場Couch(本巣市)、みずのわ(垂井町)、棚橋牛乳(池田町)

「SDG s と学校を紡ごう フィールドワークを通じて世界と地域をつなげる」 参加人数8名

講師 ※田淵琢真氏 百笑宿場Couch代表 ※河合良太氏 NPO法人泉京垂井理事

※池田町わかも会[NPO法人 まち・ひと・ことづくり工房ひなぞら] 高橋綾乃氏ら

西濃地区にて地域のみならず、様々なフィールドでSDG s に通じる活動をされている田淵氏、河合氏両名が活躍されている現場に訪れてお話しを伺うことにより、現状と課題についてより明確に学ぶことができた。

また地元の学生を中心とした団体、わかも会をサポートしている方々のお話しから、子どもが地域や社会の課題に取り組むことをどのようにサポートしていくかについて事例と助言をいただくことができた。



第3回 12月1日(日) 13:30~17:00 場所 岐阜市中央青少年会館

「SDG s の伝え方、学び方を参加型でやってみよう」 参加人数9名

講師 ※世古英弘氏 JICA岐阜国際協力推進員 ※松井佐代氏 愛知国際ステーション



JICAが推進しているSDG s の取り組み様々な機関との連携について知るとともに、開発教育の意義について話し合うことをおこなった。

続いてトンガにおける災害問題を切り口にして、SDG s と身の回りの防災との関わりを参加者同士で学んだ。さらに、学生を対象とした児童労働をテーマにしたワークショップを体験して、派生図や行動宣言、フォトランゲージなど実践に活用できる技法を深く学び合うことができた。

第4回 1月12日(日) 13:30~17:00 場所 岐阜ハートフルスクウェアG

「事例研究会、事業報告」 参加人数10名

発表者 ※山根大典教諭〔各務原市立鵜沼第三小学校〕 ※梅村勇紀〔岐阜県立東濃高等学校〕

研修に参加をした兩名の先生が、講座においての気づきと学校における実践、そして今後の展望について発表を行った。その後、各グループで学校における取り組み方法について意見が交わされた。

また、GOAL 16に示された公正をテーマにした教材『ネット炎上カード』を今回作成して、よりよいものとするために実際に検証を行ってみた。

最後に本年度の事業報告を行うとともに、来年度以降の事業について、発展的に発信と継続していくことが確認し合った。



今後の課題

1.還元方法と課題

本団体は、開発教育の実践者や青年海外協力隊経験者を中心となって設立された団体です。設立にあたっては国際協力推進員(当時)の世古英弘氏に多くのご助言とご協力をいただきました。開発教育は近年、自分と地域と世界とのつながりを認識し公正な社会を実現するために個人のエンパワメントと参加するスキルを身につけるものとして、取り扱う分野は広範囲に及んでいます。

SDGsの概念は開発教育の内容に多く関わります。今回の研修においては地域電力の開発、伝統産業の保存、防災事業、流域圏のつながり、アドボカシー運動、ネット社会、フェアトレード、森林管理、ジェンダー主流、高齢化社会、公共領域、ごみ問題、子どもの人権、食の安全など様々なテーマが提示されました。このような個々の課題について、SDGsは将来を担う子どもたちに現状把握と未来に向けてのゴールを示すものとして開発教育という括りに縛られず、様々な教育活動において柔軟に応用できると思われまます。メンバーは今回の研修を通して得た知識、ファシリテーション技法はもちろん、地域とのつながり方や教員自身が参加のノウハウを、学校の教育活動や研修等により伝えていくことはもちろん、今回作成したいくつかの教材やファシリテーションスキルなどをコンテンツとして幅広く提供していきたいと考えています。また今回の研修をきっかけに、毎年JICA中部で行われる開発教育指導者研修実践編の受講へと深めていきたいと興味と意欲を持ったメンバーや参加者ができたことも成果として挙げられます。その一方で、研修地域や時期が偏っていたことや広報が不十分であったため、より多くの先生方が参加する仕組みの改善が必要かと思われまます。また、時期が短いこともあってか授業実践の検証と改善まで深掘りすることができなかつた。これで終わりとせず、今後も事例研究や教材開発の持ち寄りフィールドワークなどを行っていききたいと考えている。

2.今後の方向性について

本年度の事業はSDGsをテーマにしたものであったが、課題の発見や調査、地域の実践や連携事例といった『気づきのスキル』に重きを置いた研修構成であった。来年度は今回の研修を踏まえて次のステップとして、SDGsで提示されているゴールを達成するための『行動のスキル』とは何かを教員が学び、子供が身につける重要な概念として『アドボカシー』をテーマとして活動をしていきたい。このテーマでは子どもアドボカシーといった学校における身近な課題からアドボカシープランニングにみられる主権者教育、エイズアドボカシーといった国際的な課題とより具体的で多岐にわたる問題解決学習としての実践に活用できると推測される。また、他県の開発教育の団体とも積極的に交流と共有を図っていくようにしていきたいです。